発行／小林市立病院
地域医療連携室

こすもスマイル

45号

令和2年 9月　発行

～副病院長のあいさつ～

皆様には日頃より地域連携にご協力いただき、ありがとうございます。

今年の夏は、熊本県をはじめ全国各地に大規模な水害をもたらした豪雨の梅雨があけたあと、猛暑の毎日でした。

新型コロナウイルス感染の先行きが不透明ですが、感染対策と熱中症対策に注意をはらわないといけない暑さが続いています。

新型コロナウイルスの流行にかかわらず、救急患者や種々の病気の患者さんはおられます。感染対策をしたうえで、救急患者の受け入れや手術の施行など、これまでの当院の医療機能を可能な限り維持していくことが最も重要です。新型コロナウイルス感染の拡大だけでなく、通常の医療機能を継続できないような、「医療崩壊」を恐れています。

小林市立病院は西諸県郡の地域医療支援病院、感染症指定医療機関であります。地域医療を支えるとともに、新型コロナウイルス感染に対しても、地域の役割を担っていきます。そのために、当院においても通常通りの患者さんの治療とともに、職員の感染予防策や診療形態の見直しを行っています。患者さんやご家族に様々なご不便をおかけしていることと思いますが、ご協力をお願いします。

私は手術患者さんの術前、術中、術後の麻酔管理にたずさわる役割ですが、通常通りの手術がこれまでどおり円滑におこなえるように願っています。

副病院長　麻酔科科長兼任　窪田悦二

理　念

「安心、安全で信頼される病院を目指します」

【基本方針】

◎ 西諸の中核病院として、地域の医療機関と連携し、高度な医療を提供します

◎ 職員一丸となって、迅速な対応とチーム医療で、安全な医療を提供します

◎ 誠実かつ真摯（しんし）な姿勢で日々研鑽（けんさん）に努め、信頼される質の高い医療を提供します

◎ 自治体病院として、平等で心が通い合い、安心できる快適な療養環境を提供します

◎ 患者様と家族の満足を追求し、プライバシーの保護をはじめ患者様の権利を尊重します

診療部紹介

整形外科　～健康寿命の延長を目指して～

２０２０年４月より福永　幹先生と共に赴任しました。私はもともとこちらが地元であり、懐かしい雰囲気に浸りつつ診療に励んでおります。

さて、日本整形外科学会では、高齢者の歩行障害、易転倒性、易介護状態をもたらす包括的な疾患としてロコモティブシンドロームを掲げ啓蒙しています。平均年齢も上昇し超高齢化社会を迎えつつある我が西諸地区にとって非常に重要な疾患概念と考えています。厚生労働省の報告によると、男性の平均寿命は約 81 歳、女性の平均寿命は約 87 歳ですが、日常生活に制限のない健康寿命は男性 約 72 歳、女性は約 74 歳であり、健康寿命とのギャップは男性で約 10 年、女性で約 12 年です。これは日常生活に制限のある期間にあたりますので、上記の期間の生活の質（QOL=quality of life）は著しく低下します。ロコモティブシンドロームの原因となる疾患には、腰部脊柱管狭窄症を代表とする脊椎疾患、骨粗鬆症に伴う骨折（脊椎圧迫骨折・大腿骨近位部骨折など）、変形性股関節症や膝関節症などが代表的な疾患として挙げられます。当科では、これらの疾患や様々な外傷の加療を行っています。

骨粗鬆症に対しては骨形成・骨吸収マーカーや骨密度の測定、家族歴・骨折歴聴取、年齢考慮のうえ、治療方針を決定します。特に女性は平均の骨密度の方でも 70 代前半で骨密度 70%を下回り骨折のリスクが増加します。また、骨密度が良くても骨質が不良と考えられる場合や、家族で骨折歴がある場合なども治療対象となっています。現在、日本での骨粗鬆症患者は 1000 万人（うち 800 万人が女性）を超えるといわれていますが、そのうち 200 万人しか治療を受けていないのが現状です。早期の骨粗鬆症加療により脊椎圧迫骨折や大腿骨近位部骨折を予防することが一番の目的です。

変形性膝関節症は、膝関節のクッションの役割や関節運動を滑らかにする軟骨が摩耗することにより疼痛を来す疾患です。歩行開始時に膝関節の内側に疼痛を自覚することが多く、進行すると O 脚となり関節可動域および筋力低下を来します。こうして運動機能低下⇒疼痛増悪という悪循環に陥り、転倒・骨折リスクも高まり、最後には寝たきり状態となってしまいます。治療は保存療法、手術療法があります。保存療法は鎮痛剤内服やリハビリ指導が中心となります。保存療法で治療効果が得られない場合には、人工膝関節置換術などの手術を検討します。人工膝関節は日々進化しており、最近では耐用年数 20 年以上といわれています。また、人工膝関節置換術は周術期の疼痛が比較的強い手術でしたが、カクテル製剤局所投与の導入により、かなり軽減しスムーズにリハビリに移行できるようになっています。東京大学医学部 22 世紀医療センターの報告によるとレントゲン上、変形性膝関節症を呈する方は 2400 万人と推定されており、今後、さらに増加すると予想されます。

当科では、上記のような治療を通じて西諸地区の健康寿命の延長、QOL の改善を目指して、微力ながら努力したいと考えています。

整形外科科長　上通　一師

看護部紹介

5階病棟

当病棟は、消化器外科・腫瘍外科、小児科の一般急性期病棟で感染症４床を有した54床の病棟です。入院患者さんの主な疾患は胃、大腸、胆のうなど消化器関連のほか、肺、乳腺疾患です。手術療法や手術前後の化学療法および終末期の患者さんを多く受け入れています。スタッフは看護師ほか総勢33名で、リハビリスタッフなど多職種と連携を図りながら、安心して治療や療養生活が送れるように取り組んでいます。20代、30代の若いスタッフが多く、活気ある雰囲気で日々看護を提供しています。

このように急性期から終末期の患者さんへの対応は、幅広い知識と技術が必要であるため、看護師は「ストーマ」「化学療法」「緩和ケア」の３チームに分かれ、定期的に勉強会を開催し、チーム内のスキルアップを図っています。またチームが主体となって患者さんが安心して治療を受けられるように取り組んでいます。特に当病棟には大平落里美緩和ケア認定看護師が在籍しているため、がん性疼痛の緩和や精神的サポートを積極的に行い、がん患者さんに緩和ケアが提供できることを目指しています。

「この病棟で最期の時を迎えることができてよかった」と患者さんやそのご家族に心から思って頂けるよう、日々取り組んでいます。

これからもベテランや中堅スタッフの知識と技術、若手スタッフの元気を武器に地域の皆様が安心して入院生活を送れるようサポートさせて頂きたいと思います。

5階病棟　主任看護師　岩道　一也

コメディカル紹介

事務部　経営企画係

今回は、事務部経営企画係をご紹介します。

経営企画係は、病院２階の事務部フロアーにあり、医療スタッフが診療に集中できるよう、また、患者さんが安心して医療を受けることができるよう医療スタッフと連携し事務的なサポートを行っています。具体的には経営企画に係る提案や各種届出及び委託契約を行う担当、電子カルテ等のシステムやホームページを管理する担当、診療材料などの物品を調達する担当で構成されており、係長以下６名で業務を行っています。

最近では、新型コロナウイルス感染症対策や九州豪雨におけるDMATの災害医療支援等の調整等を行っています。また、８月には休床中の12床の再開に伴う医療スタッフとの調整や各種届出、９月には電子カルテシステムの更新を予定しており、その準備に追われる毎日です。

平成21年９月に新病院で診療を開始して11年が経過しました。新築当時の療養環境及び医療スタッフの執務環境を維持できるよう、努力いたします。

事務部　経営企画係長　武田　慎一

D-MAT 活動紹介

災害派遣活動報告（九州豪雨災害）

当院は、県から災害拠点病院（地域災害医療センター）の指定を受け、災害時における医療体制の充実強化に取り組んでいます。その中の一つに、災害派遣医療チーム「DMAT」があります。

当院の DMAT は、平成 25 年度に編成され、現在、医師２名、看護師５名、業務調整員２名で大規模な災害等が発生した際に求められる医療に対応できるよう備えています。

令和２年７月４日に発生した九州豪雨災害においては、熊本県からの DMAT 派遣要請を受け、宮崎県では７月５日から DMAT の派遣を開始し、当院は第２次派遣隊として、7月7日～7月9日まで八代市、芦北町、津奈木町で災害派遣活動に従事しました。

被災した病院では、１階部分の浸水により床が崩壊し、水道水や空調が使用不可となり、結果として入院患者の熱中症のリスクが高いことから病院避難となったケースもありました。

派遣された DMAT のメンバー
医　　師　　島名 昭彦
看　護　師　　福永 幸枝
　　下久保 香織
業務調整員　　三角園 祐司

被災した病院の様子

活動内容としては、浸水被害により診療機能を維持することが不可能となった医療機関の入院患者の搬送や、避難所でのメディカルチェック等を行いました。搬送は、DMAT や自衛隊が連携・協力して行い、２日間で 63 名の患者を近隣の受け入れ病院へ搬送しました。また、避難所でのメディカルチェックは、本部に避難者の詳細情報が入っていない避難所に出向いて、避難者の体調把握、衛生面（特にコロナ感染等のリスク等の評価）の管理などの避難所のスクリーニングを行いました。避難所では新型コロナウイルス感染対策を考慮して、ソーシャルディスタンスが確保されていました。

活動を終えて実際の現場に足を踏み入れたとき、道路に堆積した土砂やがれきを目の当たりにし、普段は穏やかな川が豪雨の影響で想像を超える勢いで氾濫していたことに驚愕しました。みなさんも普段から災害への備えは行なっていると思いますが、災害が起きる時は、いつも突然です。やはり、普段から避難所までのルートの確認や常日頃から近隣の KYT（危険予知トレーニング）が非常に大切になると改めて感じました。

最後に、宮崎県においても、南海トラフ巨大地震などの大規模災害が想定されています。当院では、県内外で開催される訓練等に参加して、南海トラフ巨大地震に限らず、想定される様々な災害に備え、有事の際のダメージを軽減できるよう努力したいと思います。

DMAT 業務調整員（理学療法士）三角園　祐司

連絡先
小林市立病院　地域医療連携室
TEL　0984-23-8225（直通）
FAX　0984-23-8226
Mail　k_hosp4@city.kobayashi.lg.jp

スタッフのひとこと

「今日は 40 枚とっといた」「ありがとう！」

我が家の庭で毎年どっさりとれるシソの葉の話。７月下旬の今は最盛期で、かなり贅沢に使っています。冷奴、パスタ、サラダ、ソーメン、卵焼き、…とにかく用途が広いのです。

薬味の代表格のようでありながら、その存在感は大きく、あるのとないのとでは大違い、大変ありがたい葉っぱです。

本誌本号が発行される９月は、収穫の終盤を迎えているころでしょうか。

どうか、そのころ、世の中が、そして人々の心が、今より少しでも穏やかになっていますように。

地域医療連携室 医師事務作業補助者　續山　純